

がっぱ大さわぎ

こぐれまさお むたなはゆい
木暮正夫 作 渡辺有一 絵



ぜんこくかごうとしよかんまうきかいせんていとしよ
全国学校図書館協議会選定図書

おうぶんしや としよかん
旺文社ジュニア図書館

N. D. C. 913 160P 23cm

❖ 読者のみなさんへ ❖

「旺文社ジュニア図書館」は、小学校一年生から中学生までが、それぞれの学年で読むのにふさわしい作品をそろえたシリーズです。日本と世界の名作童話に、新しいすぐれた創作を加え、冒険談、探偵物語、動物物語、SF、ノンフィクションなど、いろいろな分野の作品がはいっています。

美しいさし絵入りで、らくに読みながら読書のたのしさが味わえ、心の成長に役だつシリーズです。

(旺文社ジュニア図書館)

かっぱ大さわぎ

定価 750円

1978年 5月25日 初版発行

(落丁・乱丁はお取りかえしますの
で本社に直接お申し出ください。)

1979年 第 3 刷 発 行

作 本 暮 正 夫
絵 渡 辺 有 一

発行者 立 澤 節 朗

印刷所 合資会社 中村印刷所 / 開成印刷株式会社

製本所 株式会社 市川製本所

発行所 株式会社 旺 文 社
162 東京都新宿区横寺町

TEL (編集) 03-266-6374
(販売) 03-266-6415

8393 | 690-48 | 0724 | 903119

© 木暮正夫 / 渡辺有一 1978

(許可なしに転載、複製
することを禁じます)

Printed in Japan

かつば大さわぎ



渡辺有一絵
木暮正夫作

おうぶんしゃ としよかん
旺文社ジュニア図書館

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

も
く
じ





1. 東京^{とうきょう}からきた記者^{きしや}とカメラマン 7

2. 化石^{かせき}ひろいにく朝^{あさ} 32

3. こうらをつけたへんなもの 49

4. かつばはマヨネーズを食^たべない 74



5. ねこのしっぽのかたむすび 97

6. クウがしやべった! 117

7. つくえの上のおき手紙 135

あとがき 154

—— そうてい・さしえ 渡辺有——
わたなべ ゆういち



1. 東京からきた記者とカメラマン

土曜日です。

「わっせ、わっせ、わっせ……。」

ぼくが、学校からずうつとマラソンで、まっすぐに、いそいで帰ってくる
と、ぼくの家の前に、黒ぬりの高級な大型乗用車が一台、でんとまってい
ました。

「あれっ、だれかな……。」

ぼくの家には、こんな高級車で乗りつけるお客さんなんて、まずありません。



ぼくは車の近くで、はっと足をとめました。ぼくの家の前まえの道みちは、表通りから少しはいつていて、道みちはばがせまいのです。車の横よこは、自転車じてんしゃがや々と通とおれるくらいしかあいていません。

乗用車じようしやは、グリーンのナンバープレートをつけていました。東京ナンバーのハイヤーです。アンテナのようなぼうに赤い三角さんかくのはたがむすんであつて『少年しょうねんゴールド』と、そめぬいた文字もじが見みえました。おまわりさんのようなぼうしをかぶった運転手うんてんしゅさんが、はねぼうきで、車くるまについたほこりをはらっています。『少年しょうねんゴールド』は、マンガをたくさん読んだ週刊しゅうかんの少年雑誌しょうねんざっしの名前なまえです。

「ただいまあ。」

ぼくが、げんかんからはいつていくと、お母さんが、とび出してきました。
「雑誌社のかたが急に東京から見えて、クウのことを、いろいろインタビュー
ーしたいんだって。」

クウというのは、ぼくが、かっているかっぱの名前でした。ぼくの住んで
いるヒガシタチバナ市は、東京から北西に、およそ一三〇キロはなれた町で
す。むかしは、お城のある、こじんまりした城下町でしたが、いまでは、人
口も二十六万の都市で、大きなビルもたくさんなっています。

東京からだど、高速道路をとばせば、二時間もかからないでやってこられ
ますが、ハイヤーの代金は、ずいぶんかかるはずです。けれど『少年ゴール
ド』は、たくさん売れていて、会社も大きいので、ハイヤー代などもんだい

にしないのでしよう。

「クウのやつ、このところつかれているんだよ。だから、インタビューは、かんげいしたくないんだ。ことわってくればよかったのにな。」

「いきなり、おしかけてこられちゃったのよ。一時間くらいでしつれいしますって。おひるごはん、さきにすませちゃう？」

「もちろんだよ。それより、クウは元気になっているかなあ。」

「つかれているせいか、きげんはよくないみたいだけど、食欲もあるし、元気なことは元気ね。」

お母さんは、ぼくのホット・ドックをつくりながらいいました。ぼくは、ホット・ドックが大好きです。土曜日のおひるは、まい週、ホット・ドック

にきまっていました。

ぼくは、二階^{かい}にあるぼくのへやにかばんをおきにいきながら、気^きになってしかたのない、クウのようすを見^みました。クウは水^{すい}そうにいるかと思^{おも}ったら、お母^{かあ}さんが、あんでくれた藤^{とう}ざいくのゆりいすに足^{あし}をのばして、ぼんやりと雲^{くも}をながめていました。

「クウ、雑誌^{ざっし}社のインタビュ—なんだってき。あとで、おうせつ間^まにきてくれないか。」

「クウ……。」

へんじはしたものの、あまり気^きのりがしていないようすでした。

「じゃあ、さきにおりているからね。」



「クウ……。」

（うん、わかった。めんどくさいなあ——）

クウは、そんなふうなへんじをしました。

ぼくは、台所だいどころのテーブルで、ホット・ドックを食たべてから、おうせつ間まにはいっていきました。

「やあやあ、きみが康こういちくん。『少年しょうねんゴールド』の編集部へんしゅうぶのものです。よろしく。」

お客さんきやくさんは、二人ふたりいました。記事きじを書く人ひとと、カメラマンです。記事きじを書くらしい人ひとが、ぼくに名刺めいしをくれました。

「じつは、かっぱを発見はっけんしてかっているきみのお手てがらを記事きじとカメラでり

ポートして、特集にしたいと思っ
てね。」

記者がいうと、カメラマンはもう、
ぼくにむけたカメラのシャッターを切
りはじめました。

「康一くんは、たしか、ヒガシタチバナ
市立星が丘小学校の四年生だったね。」
記者はメモを見ながらいいました。

「ええ、そうです。」

「化石ひろいにいって、かっぱのクウ
を見つけたっていうけど、きみの学校
では化石ひろいがさかんなの？」

「いいえ。学校と関係なく、いとこの
達ちゃんにつれていってもらったん
です。」